

2010年上海国際博覧会
日本館出展基本計画

2008年2月22日

上海国際博覧会日本館計画委員会

序

2010年5月1日から10月31日まで開催される上海国際博覧会については、2006年3月に中国政府からの公式参加招請があり、経済産業大臣主催の「国際博覧会に関する有識者懇談会」の開催、また経済産業省および日本貿易振興機構（ジェトロ）上海センターにおける「上海国際博覧会情報センター」の設置を経て、2006年10月20日の閣議において、日本貿易振興機構（ジェトロ）を参加機関として公式参加することが了解されました。また、参加に伴う諸準備を円滑に行うため、関係省庁からなる準備会を設け、経済産業省を幹事省、国土交通省と環境省を副幹事省とすることが了解されました。

その後、有識者懇談会の下に、日本の出展内容に関する検討を行う部会と情報収集および日中協力に関し検討を行う部会が設けられ、それぞれ検討頂いた結果、2007年7月に基本コンセプトが『「2010年上海国際博覧会」に関する日本の取り組みについて』として策定されました。この中で、「こころの“和”・わざの“和”」というテーマ、また、日本の出展への取り組み方針として、「官民一体となった出展の実現」が示されました。

それ以降、この基本コンセプトを具現化するため、専門家との意見交換や情報収集を行った上、2007年11月に、日本貿易振興機構（ジェトロ）、経済産業省および主要協賛企業3社の代表から構成される上海国際博覧会日本館計画委員会およびその下部組織として基本計画策定専門委員会を設置し、基本計画の策定を行って参りました。

今回とりまとめた基本計画は、今後、日本の上海国際博覧会公式参加の準備を進めてゆくに当たっての骨格となるものであり、本計画に基づき建築、展示、行催事、運営等各部門の諸準備を鋭意進めて参ります。官民一体となった日本の上海博覧会公式参加を成功に導くため、関係各位のご理解とご協力をお願い申し上げます。

なお、本書は、第1章で上記基本コンセプトをとりまとめた全般的な出展の考え方を述べ、第2章で建築、展示、行催事、運営等各部門の基本計画を示し、以下、第3章、全体工程計画、第4章資金計画という構成になっています。また付録として、上海国際博覧会概要、同一般規則、同特別規則の一覧等の関係資料を添付しています。

2008年2月

上海国際博覧会日本館計画委員会

第1章 出展の考え方

2007年7月に策定された基本コンセプトで表された出展の基本的な考え方は以下のとおりであり、今後の出展準備もこの考え方に従って進めることとする。

I. 上海国際博覧会に日本が出展する意義

上海国際博覧会への日本出展は、以下のような出展の意義を有している。

1. 日本と中国・アジアとの連携強化

日本は、政治・経済のみならず、文化・芸術など様々な場面を通じて、成長著しいアジアとの連携をますます深めていくことが必要である。中でもひととき大きな存在である中国の成長・活力を引き込むことは、極めて重要である。上海国際博覧会は、中国の一般の人々をはじめとして、様々な人々が訪れ、相互交流・相互理解を深めるまたとない機会である。

2. 持続可能な社会への模索

地球温暖化をはじめとする環境問題が地球的規模で高まりつつある今日、環境と社会に調和した都市・生活の実現は、21世紀の人類が直面する大きな課題である。地球的課題の解決による持続可能な国際社会の構築に向けて、「より良い都市、より良い生活」をテーマとして開催される上海国際博覧会への出展に当たっては、エネルギー・環境問題に積極的に取り組んできた日本として、アジア・中国の人々とともに、この地球的課題の解決に取り組む姿勢を示すことが必要である。

3. 21世紀初の国際博覧会開催国としての理念・成果の継承

「自然の叡智」というテーマのもとに開催された「愛・地球博」は、産業・文化の展覧の場に加えて、地球的課題解決に向けた取り組みの場として新たな価値を創出し、国際的にも高い評価を獲得した。国際博覧会の新たな潮流を維持し、自然と人間の共生という「愛・地球博」の理念や「愛・地球博」で提示した技術によるブレークスルーという考え方などを上海国際博覧会に継承・発展していくことは、前開催国としての日本の国際的使命である。

II. 日本出展の目標

上記の点を踏まえ、上海国際博覧会への日本の出展に当たっては、以下のとおり目標を設定する。

1. ありのままの日本を知ってもらい、日本をもっと好きになってもらう

今後の日本と中国・アジアの関係のさらなる拡充に向けて、上海国際博覧会への日本出展を一つの契機として、中国・アジアの人々の日本への理解や好意度のより一層の向上を図る。

2. 持続可能な21世紀型の都市生活の姿を提示する

日本は成長の過程において、公害等の環境問題、都市への集中による様々な問題等、現代の人類が共通して抱える問題に直面しながら、その解決に向けて耐えざる取り組みを行う中で、エネルギー・都市環境・安全といった地球的課題に貢献しうる知恵、技術やシステムを生み出してきた。これを活かしながら、共生・調和の精神がもたらす日本のライフスタイル、価値観等を示しながら、持続可能な21世紀型の都市生活の姿を提示し、地球的課題の解決に貢献していくべきである。

こうした目標を掲げて日本が出展するに当たっては、日本のライフスタイル、価値観、文化や先端技術を、今日的・普遍的な要素に再設計し、国際的に発信する絶好の機会と捉え、政府だけでなく企業、自治体など、官民一体「オールジャパン」の体制で取り組んでいくことが必要である。

III. 日本の出展テーマ

上記の出展目標や取り組み方針を整理すると、目標1.は「日本と中国・アジアの和」、目標2.は「地球の和」、取り組み方針は「オールジャパンの和」と言い換えることもできる。つまり、上海国際博覧会への日本の出展は、「和」というテーマワードに集約されると言える。

このテーマワード「和」をメッセージとして明文化して、

「こころの“和”・わざの“和”」

をテーマとして、日本は上海国際博覧会に出展する。

この出展テーマには、以下のような意味が込められている。

1. 自然に感謝し、自然とともに生き、多くに人々と交流し、共に働き、共に創る「こころの“和”」は、「調和」「平和」「共生」を愛するこころ。
2. 自然の叡智に学び、限られた資源を有効に、美しくかつ効率的に活用する「わざの“和”」は、「つなぐ・加える」「大切にする・無駄にしない」という考え方。
3. 「こころの“和”・わざの“和”」の融合が生む、普遍的なライフスタイル、価値観、文化を、新たなる時代に世界に提起し、「より良い都市、より良い生活」の実現に向けた「持続可能な21世紀型の都市生活の姿」を提示する。

第2章 各区分の基本計画

I. 建築

1. 基本的な考え方

建築自体が展示品としての性格を持つ日本館の建築については、出展理念・テーマの具現化を目指し、次のとおり取り組む。

- (1) 時代を切り開く実験を行ってきた万国博覧会の歴史的文脈を踏まえ、同時代性、未来性のある実験的側面を持つ。
- (2) 上海博覧会テーマとも共振する持続可能な都市型建築、環境にやさしい建築の創造を目指す。
- (3) 「和」を意識した技術や表現を考慮する。
- (4) 記憶に残る建築、新しい日本の心象性を持つ建築を目指す。
- (5) パビリオンとしての使いやすさやユニバーサルデザイン、安全快適な空間づくりの視点を基本として持つ。

2. 敷地条件

- (1) 日本館の立地は、博覧会浦東会場東のAゾーンの最東部に位置し、ゲートに近接している。南西は広場に面し、それ以外の三方は会場内道路に接道する。ゲートの正面に建つ建物であるため、ゲートから視界に大きく入り、アイキャッチャーとしての性格が求められる。
- (2) 会場観客主動線は、ゲートと会場中心に配置された中国国家館を結ぶ高さ約6mのデッキ歩道であり、日本館は、基本的に敷地南東側に正面を向ける構成となる。
- (3) 敷地南西側はこの街区の広場が隣接し、またその広場に他国のパビリオン（上海世博会事務協調局〈世博局〉の用意するレンタル館）が面している。

- (4) 敷地は河川にきわめて近い河岸であり、かつ工場跡地であることから、地耐力、地盤環境が悪く、建設にあたっては、これらの物理的条件を十分配慮したものにななければならない。
- (5) 同時に、開催期間中の雨天、台風や高温多湿の気候に対応した建物のあり方も求められる。
- (6) 敷地面積は、6,000㎡。建蔽率は原則として80%。周回に歩道があり、壁面線後退規制、高さ規制その他の会場建設コードが存在する。
- (7) 会場は、電気、ガス、上水、冷水の供給はあるが、中水はない。

3. 基本諸元

- ・延床面積 7,000㎡～7,500㎡
- ・建築面積 4,000㎡～4,500㎡
- ・高さ 約20m
- ・階数 2～3階（基本的に地階は設けない）
- ・仮設建築物（会期終了後に撤去予定）
- ・構造的床加重想定（展示空間部） 約500kg/㎡
- ・受電想定容量 約2,100KVA（世博局と要調整）
（上海では三相（動力）電圧は380V、単相（一般）電圧は220V）
- ・観客人員処理能力（想定断面交通量） 約60人/分（3,600人/時）

- ・なお延床面積7,000㎡～7,500㎡のうち、4,250㎡～4,500㎡は展示空間、2,750㎡～3,000㎡は運営・管理空間とする。展示空間は、展示関係の機械室、バックヤード、さらにイベント屋内機能（屋内ホール）を含む。運営・管理空間は、一般管理関係諸室や倉庫を含むバックゾーン、共通ゾーン（階段、廊下、トイレ等）、機械室や中央監視室の他、VIP接遇関係諸室や小規模の多目的室、レストランを含む。
- ・屋外イベント空間は、基本的に屋根で被覆されているものとする。
- ・日本館入口に近い地表階には、半戸外の観客待ち空間として800～900㎡を確保する。

4. 空間構成案

(1) 平面構成

- ・内部機能（展示観覧空間、運営・管理空間、VIP接遇空間、営業施設空間）を明快なゾーニングによって構成。
- ・展示における分類（ゾーンⅠ、ゾーンⅡ、ゾーンⅢ）も基本的にこの順序でスムーズに流れるように構成。
- ・観客が待ち空間から入館し、退館するまで、一連の骨格動線（生命体で言えば循環器系）に上記の機能空間（器官）を適切な形で接続し、有機体的な全体を形成。
- ・基本的に、敷地北西—南東（長手方向）に対し、中心軸をとった平面構成を展開。
- ・展示空間には回遊のダイナミズムを、運営・管理空間には利用しやすさと合理的配置を第一義に構成。
- ・利用主体の異なる動線（観客、VIP、スタッフ等）や移動媒体や意味合いの違う動線（一般歩行、車での来館、モノの搬出入、緊急等）を区別した上で、それぞれ循環性を持たせながら、相互に適切に関係づける。特に、観客動線とスタッフ動線は峻別する。
- ・観客の入口と出口は距離をおいて設置。またスタッフ入口、VIP入口と、観客入口は分離。
- ・公共空間に対しフロントの必要な機能空間（待ち空間、イベント関係施設、営業施設）は、基本的に視認性を含めアクセスのよい位置に配置。
- ・イベント空間および営業施設には、パビリオンに入館しなくてもアクセスできる独立動線が必要。

(2) 立体構成

- ・層状構成システムの採用によって、垂直的なゾーニングの実現。
下階（1階）： 基本的に運営・管理空間（出入口等は除く）
上階（2階および3階）： 基本的に展示空間およびVIP接遇空間
- ・展示観覧体験は、1階から車椅子にも対応可能な上昇トラベレーターで10m内外のレベル（3階）まで上がり、そこから展示空間内を降りながら観覧体験していく構成。また、このレベルから、パビリオン内が一望俯瞰できる場を創造。
- ・建物すべてを被覆する大屋根（スーパーroof）を屋根階に設置し、下部の複合化した展示空間を傘下に収めるという立体構成を創造。

スーパーーフ下部に自由な展示空間や半戸外待ち空間などを配置。また、スーパーーフ自体に、顕在化しデザインと融合した環境配慮技術を採用。

- 地表下は基本的に基礎や沈下抑止杭、改良地盤の層として扱い、一部必要なトレンチ（壕）等以外は地下室なし。
- なお、1階階高は5 m以上という規定があるが、これは今後の検討課題として望ましい方向（1階を運営・管理空間とするなら、より低い階高の設定）での協議を世博局と行う。

・ 展示

1. 基本的な考え方

出展理念・テーマを踏まえ、中国の人々の日本と日本人に対する理解が進み、イメージや好感度の向上に資すること、また持続可能な21世紀型の都市生活のあり方を提案することを目的に、以下の方針に沿って展示に取り組む。

(1) 明快なストーリーを備えた訴求力の高い展示構成 【対話】

展示要素を漫然と並べるだけでは出展の意義は果たせない。単純な「情報提供」の次元を超えて日本や日本人への理解と共感を育むためには、パビリオンが総体としてメッセージを語りかけることが不可欠であり、そのためには入口から出口に至る展示のすべてが明快なコンセプトとストーリーの下に統御されることが条件となる。

(2) 来館者と心理的に応答する双方向性を持った展示環境 【触発】

いかに熱いメッセージを備えていようと、一方的に演説するだけでは対話は成り立たない。求められているのは、来館者が自らとのかかわりのなかで日本や日本人について考えはじめるきっかけをつくることであって、基本原理は『触発』にあると考えるべきである。立場やレベルに応じたその人なりの見方、自分なりに理解しようとする意欲を削ぐことなく、自ら感じ、自ら発見するための舞台が求められている。

(3) “観る” だけに終わらない “感じる” 展示空間 【体感】

展示のメディアは空間そのものであって、訴求効果を高めるためにはその性能をうまく引き出すほかはない。期待されるのは、頭での「理解」だけでなく五感で「体感」できる空間であり、理屈での「説得」ではなく直感で「共感」できる空間である。“陳列” を超える発想が必要であり、空間性を十分に活かした「ここでしかできない経験」が望まれる。

(4) 複数の階層により編成される重層的な展示構造 【発見】

多様な日本人の営みを伝えるためには、複数の視点からみた複合的なイメージの獲得が不可欠であって、美術館のような単一の展示構造では目的を果たせない。また、属性や知識レベルの異なる多様な

来館者のニーズに応える上では、選択性の高い多層的な訴求構造が必要となる。多彩な切り口を用意した複数の階層が重層し、それぞれの階層が互いに補完機能を果たす構成が求められている。来場者にさまざまな視点を提供し、自ら“発見”する舞台をつくる展示構造を目指す。

2. 展示空間の構造

本展示の理念と目的を効果的に達成するために、展示空間が備えるべき構造特性として、以下の3つの実現を目指す。

(1) 空間形態 — “俯瞰”と“軸線” —

独立した「展示室」を連続させる形式ではなく、中核的な展示要素をひとつの大空間の中に配置・構成し、それらを一体的に演出・展開することで、“都市的”景観を創出するとともに、迫力がありかつ印象深い空間を現出する。そうした空間特性を最大限に活かすため、まず始めに空間全体が俯瞰できる地点へと来館者を誘い、迫力ある光景を体験してもらうと同時に、さらに、これから日本館全体を通して語られていく「物語」の存在を実感してもらう。さらに、その効果を最大化するために、日本館全体を貫く象徴的な“軸線”を配する。迫力ある展示装置としての機能を併せ持つこの軸線は、一体的な大空間を統制・演出する「空間の軸線」であると同時に、展示ストーリーの流れを象徴する「物語の軸線」でもある。

(2) 空間構成 — “花火”と“昆虫採集” —

知識レベルや目的の異なる不特定多数かつ多層的な来館者それぞれに対して効果的に情報を訴求するための手段として、上記の空間形態の特性を活かし、一瞥しただけでメッセージの核心が実感できる“花火型”展示と、自らの意志で情報の奥へと分け入っていく“昆虫採集型”展示を組み合わせた重層的な構成を実現する。

(3) 空間環境 — “探索”と“体感” —

共感の醸成を目指す本展示にあっては、情報の一方的・教条的な送達に終わらず、来館者が自発的・能動的に情報を掴み取ることを誘発する構造が期待されている。日本館を訪れた観客の一人ひとりが、館内を巡り歩く中で自ら情報を“探索”し“発見”し、自分なりのイメージを組み立てるための舞台となるような情報環境の創出を目

指す。また、共感とは実感であり、実感は体験によってもたらされることから、できる限り情報を空間体験として提供すること、すなわち“体感”する展示を心がける。

3. 展示構成の枠組みと展開例

(1) 【ゾーンⅠ】 プロローグ ―“和”の誕生―

- ①会場の雑踏から来館者を日本館という小宇宙に迎え入れる空間。
- ②非日常的空間の中で来館者の意識の切り替えを促すとともに、その後続く館内展示へのプロローグとして、興味の喚起と期待感の醸成を図る。
- ③来館者は、これからはじまる物語の基本概念“和”のイメージを感覚的に掴み取っていく。

<展示展開例>

- ◎日本館を貫く展示文脈の入口の役割を果たすものとして、来館者をまず初めに迎え入れるのは、トンネル状の参道的な空間だ。映像化されたイメージが観客自身を包み込んだり、奥行きをもって二重に重なったりしながら、空間全体が迫力ある形で演出されている。
- ◎漢字をシンボルにさまざまな“漢”のイメージが日本文化にとりいれられ、仮名をはじめとする“和”のイメージが生み出されていく。そして両者は対極的な美意識をもちながらも、「対立」ではなく「両立」の道を進む。
- ◎こうした日本と中国の文化的つながりを想起させる文物のイメージで空間を満たし、本展示の基本概念である“和”のイメージを与えるとともに、日本の文化や都市は中国からも影響を受けており、日本は独自の文化や都市の体系を樹立しながらも、他文化からの影響を大切に今に伝えていることを伝える。

(2) 【ゾーンⅡ】 ライフスタイル・ショーケース ―くらしの中の「和」―

- ①ゾーン1を抜けると、突然、目の前に大空間が広がる。ゾーン2とゾーン3が有機的に連続したこの空間は、日本館のメッセージを凝縮した巨大な体感空間であり、その全貌を俯瞰することから体験が

はじまる。

- ②ゾーン2は、「等身大の日本」すなわち「素顔の日本人」に出合うゾーン。日本の都市やそこにある生活を提示し、日本と日本人に対する触れ合いの場をつくることで、来館者一人ひとりの中に共感を育むことを目指す。
- ③中核展示を中心とした3つのテーマ空間の中に、最新の映像技術も駆使しつつ、多様な日本の“いま”が、鮮度を保ったままさまざまな形で凝縮されている。空間全体が、On（社会的活動）とOff（プライベートな行動）の双方を取り込んだ、わかりやすく魅力的な「ライフスタイル・ショーケース」となっている。
- ④中核展示を貫き、日本館を縦断する一本の軸線が中央に走っている（〈仮〉イマージュの河）。大河のようにゆったりと水がたゆたう中を、日本の美しい自然風土や伝統的な風物などが絵巻物のように流れていく。
- ⑤来館者は、自らを取り巻く多彩な情報空間を巡り歩く中で、日本人のライフスタイルを概観しながら、そこに現れる現代日本の生活・環境・文化・伝統・風俗等を肌で感じるとともに、その底流にいまも脈々と息づく“和”の知恵と感性を感知する。すなわち、「自ら選び取った多様な生き方」と「そこに通底する固有の価値観や美意識」を実感する。

【人（ひと）】（中核展示）

日本人の日常をさまざまな角度からすくい取り、種々の表現手法を駆使して、日本人の素顔を伝える。衣食住など身近なテーマを題材に、日本人の多様な「個の生き方」を追体験していく。

<展示展開例>

それぞれの人生を送る日本人の個室をそのまま再現するとともに彼らの1年をドキュメンタリー映像として記録した展示、ある日ある時に着ていた衣服と持ち物をそのまま“捕獲”した展示、ある1日の家族の朝食を入口にそれぞれの1日を追いかける展示など、日本人の暮らしや趣味の世界を探索することで、日本人の生態が生き活きと描かれていく。

また、通常の展示に加えて、日中両国をリアルタイムで結び中継することができる機能を付加し、直接対話を可能とする。

【絆（きずな）】

人と人との多様なつながりを切り口に、その背景にある日本社会の特性や日本人の感性を考える。併せて、古来日本人の中に育まれてきた思いやりや礼儀正しき等日本人の気質や、暮らしの知恵などについても楽しく、わかりやすく伝える。

<展示展開例>

古来日本人が培ってきた“共生”の精神をわかりやすく伝える展示、NPOやボランティア等自らの意志と価値観で社会と積極的に向き合おうとする人々のライフスタイルを表現した展示、地域コミュニティが備える様々な機能や底力を紹介する展示など、人と人との関係性を切り口に、日本社会の特性や日本人の感性を考えていく。

【街（まち）】

日本の都市の多様性とその表情、変貌と特質、そこを舞台に展開される様々な営みや取り組みなど、暮らしの舞台としての日本の街を概観する。景観や環境技術など目に見えるものはもとより、物流や情報のネットワークなど目に見えないシステムやインフラストラクチャーについても採り上げる。

<展示展開例>

都会の喧騒、昔ながらの裏通り、通勤ラッシュ、夜の街など、日本の都市の多彩な表情が渦巻く空間の中に、「変貌する都市の物語」を語る展示、環境技術や緑化技術などさまざまな都市の取り組みを紹介する展示、日本が誇る流通や情報のネットワークを取り上げた展示など、日本の都市生活の構造と特質がわかりやすく紹介されている。

【サブ-ゾーン】 自然の叡智

愛・地球博の理念と成果を継承しながら持続可能な社会を目指して種々の取り組みを進める日本の姿を伝える。

(3) 【ゾーン III】 願い ― “和” の社会を目指してー

①ゾーン2の次に来館者を迎えるのは、中核展示「望み」を中心に多様

な演出要素が一体的に構成される空間の中で、主として技術の領域をテーマに未来に向けた日本人の志が語られていく。また、続く「夢」では、より感性に近い領域での日本人の創造性が発露している。

- ②持続可能な共生社会、豊かで潤いのある都市生活の実現を目指して真摯に取り組む日本人の営みを技術・文化双方の視点から魅力的に伝えるとともに、その原動力ともいべき日本人の未来に向けた願いを語る。
- ③来館者は、それらを訪ね歩く中で、未来への展望を語る日本人のさまざまなメッセージに触れ、“和”の社会を目指して生きる日本人の志を実感していく。

【望 (のぞみ)】フューチャー・ラボ (中核展示)

未来の技術が我々の暮らしをどう変えようとしているのかを、安心・安全、エネルギー問題への対応も含めた環境との共生、個人のニーズに対応した快適さなどのテーマに応じたストーリーを通じて、演劇的手法も活用しつつ、楽しく表現した展示装置。また、その周辺では、複数の先端的な技術成果や将来展望もわかりやすく紹介する。

<展示展開例>

光学効果と映像技術を駆使して実空間と虚空間、実像と虚像が瞬時に入れ替わる特殊な演出機構を備えた舞台上、夢の技術とそれを生み出す人間のドラマが、現在と未来、現実と夢など時空を超えた2つの世界を自由に行き来しながら幻想的に描かれていく。

【夢 (ゆめ)】フューチャー・ギャラリー

デザインやファッションなど、より感性に近い領域で、未来を拓く日本の高い創造力を魅力的に提示する。

(4) エピローグ ―共創の時代へ―

- ①日本館展示の余韻に浸りながら、最後のメッセージを伝えるゾーン
- ②日中両国の相互理解の進展を願う日本人の願いを象徴するものとして、日本人と中国人の共創の成果を象徴的に提示する。

Ⅲ. 行催事

1. 基本的な考え方

行催事については、出展理念・テーマの理解促進・メッセージ発信を目的に多様な参加主体の参加と幅広いコンテンツの活用を前提として、次のとおり取り組む。

(1) 出展理念・テーマの理解を促進する祝祭

行催事の特徴である“体感型祝祭”を通じて、出展理念・テーマの理解促進・メッセージ発信を図る。

(2) オールジャパンの多様な参加の仕組みを創出

日本館の自主企画による行催事その他、関係機関・団体、自治体、NPO、市民グループ等多様な主体に参加機会を提供し、伝統文化・芸能から現代のポップカルチャーまで幅広いコンテンツの紹介を可能とする。

(3) 多彩な行催事を実現する多様なスペースでの開催

多彩な行催事を実現するため、日本館敷地内イベントスペースの他、上海国際博覧会の催事スペースや上海市内ホテル等会場外のスペース等を活用する。

(4) 展示・サイバーパビリオンとの整合性や連携を持った開催

日本館の展示やサイバーパビリオンでの情報発信との整合性や連携を持った行催事の開催により、出展理念・テーマの理解促進・メッセージ発信を行い、出展効果を高める。

2. 行催事の枠組み

(1) 公式行催事

起工式、開館式、ジャパNDER、ジャパNウィーク（ジャパNDERを含む）を開催する。

(2) 特別企画催事（テーマプロジェクト）

日本と中国の交流を促進し、出展理念やテーマを訴求する催事を参加団体や協賛を募り、協働型で開催する。

(3) 参加者企画催事

出展理念・テーマの枠組みの中で、自治体、団体、NPO、市民グループ等が独自に企画・制作・運営する催事についてスペースを提供する。

3. 主要行催事の展開

(1) 開館式（2010年4月、博覧会の開幕直前に開催）

日本館の完成を期に、日本の出展理念・テーマや展示内容を中国、日本、世界に発信する。

(2) ジャパンデー・ジャパンウィーク（博覧会協会等と調整の上、会期を決定）

公式参加者のナショナルデーとして、式典に加え、日本の出展理念・テーマを来場者や参加各国関係者に訴求するための記念行事やアトラクションを行う。また、ジャパンデーの前後数日間をジャパンウィークとして祝祭感の高い様々な日本の文化を集結した催事を行う。

○展開例

- ・ 地球的課題の解決に貢献する記念シンポジウム
- ・ 日本のアーティストによるパフォーマンス
- ・ 日中伝統芸能のパレードやストリートパフォーマンス
- ・ 日本各地の観光資源の紹介による観光誘致キャンペーン
- ・ 日本の伝統芸能と先端技術の融合

(3) 特別企画催事（テーマプロジェクト、会期中2～3回程度・各1週間程度、ジャパンウィーク開催月を除く）

日本と中国の交流を促進し、出展理念やテーマを訴求する催事を参加団体や協賛を募り、協働型で開催する。

○展開例

- ・ 日中の若手クリエイターによる共同創造プロジェクト（ショートフィルム、アニメ、音楽、エコ、パブリックアート等）
- ・ エネルギー・環境分野での日中協力実験、デモンストレーション

(4) 参加者企画催事

オールジャパンの参加を実現するため、自治体、団体、多様な主体による企画催事を開催する。

○展開例

- ・上海に拠点を持つ姉妹都市等の自治体による地域伝統芸能等のステージアトラクション
- ・団体等による各種催事（日本の衣服文化についてのワークショップ、ファッションショー、ユニバーサルデザインの紹介等）
- ・愛・地球博の継承とした市民参加催事（市民パビリオンのコンテンツの再現等）

IV. 広報

1. 基本的な考え方

広報活動については、日中両国において会期前から会期後まで以下のとおり取り組む。

(1) 「メッセージ広報」と「来場者誘致広報」

日本の地球環境問題や都市問題への取り組みといった出展理念・テーマを訴求する「メッセージ広報」と、より直接的に中核展示など日本館の魅力を発信する「来場者誘致広報」の両視点から広報活動を展開する。

(2) 「中国向け広報」と「日本向け広報」

主要活動となる中国への広報は、「来場者誘致広報」により集客拡大を図るとともに、「メッセージ広報」により中国や世界に対する日本の貢献や日中協力の重要性を発信する。他方、日本国内向けには、上海国際博覧会への日本出展の意義など「メッセージ広報」を中心とした展開を図る。

(3) 会期前、会期中、会期後の広報

会期前は「機運形成」、会期中は「来館者拡大」、会期後は「成果発信」を目的とし、初動期と会期後は「メッセージ広報」中心、会期直前から会期中にかけては「来場者誘致広報」を中心に展開する。重点広報時期を次のとおり設定し情報を集約的に発信する。

①全体概要発信期（2009年1月）

起工式に合わせ各種広報ツールを整え日本館の全体概要を発信する

②集客動員重点期（2010年3月から5月）

中国国内での上海国際博覧会への来場意向の高まりと合わせ日本館の魅力や楽しさを発信する。

(4) 関係機関との連携型広報の展開

協賛企業、参加自治体、参加NPO、旅行会社、上海世博会事務協調局（世博局）等関係先と密接に連携した広報活動を行い、効果を高めるように努める。

2. 広報活動内容

(1) 基礎的活動

①基本シンボル

日本館の基本V I（ビジュアル・アイデンティティ）として、ロゴマーク、キーカラー等を設定する。基本シンボルは、デザインマニュアルを作成し統一的に使用する。

②広報ツール

パンフレット、プロモーションビデオ、来館者用リーフレット、V I P用カタログを制作し、配布する。

③パブリシティ活動

マスコミを対象に記者発表、ニュースリリースの定期送付、プレスキットの用意・提供、また、プレスミーティングや開幕直前のプレビューを行う。プレビューには、日中マスコミを招待する。

(2) 連携型広報

①参加者広報との連携

協賛企業、自治体、N P O等日本館への参加者の広報誌・機関誌やイベントを通じた広報を実施する。

②観光業界との連携

日本の旅行会社・航空会社の上海万博ツアー・中国ツアーのパンフレットへの日本館紹介記事掲載、窓口での案内資料の配布等を行う。

③世博局との連携

世博局の全体広報や日本での上海ウィーク（2008年3月）や上海万博来場誘致活動と連携した広報を行う。

④中国関連イベントとの連携

中国で開催される日本関連イベント、日本で開催される中国関連イベントにおいて、パンフレット配布等を行う。

3. 公式記録

公式記録は、印刷物および映像の2種類を作成する。（日本語・中国語簡体字・英語）方針や構成を早期に設定し、会期終了後の制作に向け、計画・準備段階より、活動記録、データ、写真、映像等の着実な集約・管理体制を整備する。

V. サイバーパビリオン

1. 基本的な考え方

インターネット上で展開するサイバーパビリオンについては、出展理念・テーマを、リアルな日本館の限界を超えて発信し多くの人々に交流する場を提供することを目的として次のとおり取り組む。

(1) コンテンツ

「ありのままの日本を知ってもらい、日本をもっと好きになってもらう」ために、リアルなパビリオンにおける展示の時間性、空間性を超えた広がりと深さを持つコンテンツを提供する。

(2) リアルなパビリオンとサイバーパビリオンの新しい関係づくり

日本と中国の人々が相互理解を深め、多彩な交流を始めるためのきっかけを作り出すため、博覧会開催前にアンケートを行いその結果を展示に反映するとともに、開催中もサイバーパビリオンへのアクセスが現在進行形でリアルな展示に反映される展開を行う。これにより、リアルなパビリオンとサイバーパビリオンの新しい関係づくり、新たな可能性の開拓を目指す。

(3) ナビゲーションシステム

出展テーマである「こころの“和”・わざの“和”」をわかりやすく示すために、それを感じ取る手がかりとなる参加性のあるナビゲーションシステムを導入する。

(4) 環境への取り組み

愛・地球博、サラゴサ、上海と続く、万博への日本出展の背景を成す「環境」に対する日本の取り組みが、試みの段階から実現への段階へと進みつつあることを示すために、日本館を具体的な事例として紹介する。

(5) オールジャパンによる取り組み

上海国際博覧会への日本館の出展が、産官学の力を結集したオールジャパンによる取り組みであることを示すために、十分な情報を提供し、関連するウェブサイトへのリンクなどを充実する。

(6) 日本館入場の事前予約機能

多数の来館者を迎え、円滑な運営を実現するために、上海世博会事務協調局（世博局）の取り組みも確認しながら、博覧会開催前および開催期間中の事前入場予約の機能を検討する。

2. サイトデザイン

(1) 快適なサイト閲覧環境

中国では接続速度が遅いことや、使用されているパソコンの能力も考慮し、利用者が快適に閲覧できるサイトデザイン、構成を行う。

(2) 最小限の情報単位

長文のテキスト、大きな画像、尺数の長い動画などを避け、情報の単位をコンパクトにまとめることで、短時間で必要な基本情報に触れることができるようにする。

(3) 情報の内容に対応した構成

「知りたい・知ってもらいたい」基本情報については、容易に情報をたどることができる構成とし、「もっと知ってもらおう・楽しんでもらおう」情報など、利用者の側に明確な目的がないものについては「情報の森」へと誘導しその中を自由に散策してもらおう構成とする。

(4) 個人情報・表現

個人情報に関連するものへの取り組みについては、十分配慮して実施する。また、表現内容については、両国の文化の違いなどについて十分考慮するものとする。

(5) アクセシビリティ

高齢者、目や耳の不自由な人、上肢等が不自由な人に対するアクセシビリティを確保するために、アクセシビリティガイドを策定し、それに準拠したサイトを構築する。

(6) 言語対応

サイバー日本館の基本情報については世博局の公式サイトに準じた多言語対応を行う。一般コンテンツについては日本語、中国語（簡体字）、英語の3言語とする。

3. 運用計画

サイバー日本館は2009年5月（博覧会開催1年前）から2010年12月まで運用する。この間、全体の広報計画と連動し、大きく分けて5つのフェーズで展開する。

- ・フェーズ1（2009年5月1日～2009年12月31日）
- ・フェーズ2（2010年1月1日～2010年3月31日）
- ・フェーズ3（2010年4月1日～2010年4月のプレスプレビューまで）
- ・フェーズ4（2010年4月のプレスプレビュー～2010年10月31日）
- ・フェーズ5（2010年11月1日～2010年12月31日）

4. コンテンツ概要

(1) トップページ（フェーズ1～5共通）

シンプルな構成とし、言語選択、第一階層の項目へとわかりやすく誘導する。利用者の様々な動作環境を考慮し、トップページが持つすべての情報が、すぐに表示されることを第一とする。従って、環境によって特別なソフトをダウンロードする必要があるような表現は用いない。簡潔なグラフィックの中に、日本館のテーマである「和」が感じられるものとする。

(2) 日本館紹介（フェーズ1～5共通）

日本館の基本情報を提供する。各フェーズに応じて、日本館の情報の深度を深めていく構成とする。今回の出展がオールジャパンによる試みであることを示し、協力者紹介、協力者からのメッセージを示す。（関連リンクを含む）

(3) 日本館計画アンケート（フェーズ1）

「ありのままの日本を知ってもらい、日本をもっと好きになってもらう」ための展示となるゾーン2の展開のために、日本と中国の人々を対象としてアンケート調査を行う。例えば、中国の人々には「知りたい・日本」、「知って欲しい・中国」についてのアンケートを、日本の人々には「知りたい・中国」、「知って欲しい・日本」についてのアンケートを行う。

(4) もっと日本館（フェーズ4～5）

パビリオン、3つのゾーン、テーマプロジェクト、イベントの6項目を中心に展開する。それぞれ、概要を示す「ストーリー」コンテンツ、内容をもっと深く知り、楽しむための「参加型」コンテンツ、関連する項目の解説、関連リンクなどの「ノート」コンテンツの3つによる構成を基本とする。

○参加型コンテンツ展開例

・ゾーン1「ゲーム」

「和」の誕生に関連した「漢字ゲーム」などを通して、日本と中国（東アジア）が共通の文化（文字）基盤を持つこと、その基盤からそれぞれ独自の文化を発展させてきたことを感じてもらう。（例：同じ意味の漢字、違う意味の漢字、漢字から感じる共通のイメージ、違うイメージ等）

・ゾーン2「日本人データベース」

様々な観点からの日本人の「身体」測定データベースを提供する。フェーズ1でのアンケート調査の結果なども取り込み、日本人でも考えた事がなかったような視点からデータを収集分析する。会期中は、このデータベースへのアクセス状況やナビゲーション履歴などの結果をゾーン2の演出ストーリーの中に反映させるなど展示と連携した展開を行う。

・ゾーン3「フューチャー・ラボ」「フューチャー・ギャラリー」

フューチャー・ラボに登場する技術の開発者からの未来に向けたメッセージや、今後の展望、展開など、またフューチャー・ギャラリーに登場するアーティスト、デザイナーからのメッセージをビデオキャストで公開する。

VI. 運営

1. 基本的な考え方

日本館の運営については、出展理念・テーマの実現を目指し、来館者の安全を確保し、快適な観覧環境の提供に努めることを前提とし、次の方針で取り組む。

(1) 日本の心を伝える

待ち時間対策、案内サービス、バリアフリーサービス、VIP接客等について一期一会の精神で、きめ細やかな来館者サービスを実現し、日本の「おもてなしの心」を来館者に伝える。

(2) 日本の志を伝える

中国と協働しながら国際社会に貢献しようとする日本の志を展示や行催事のみならず、スタッフを中心とした日中の協働・協力を通じて伝える。

(3) 日本の試みを伝える

持続可能な社会に向けて、世界の未来に貢献する日本の先端技術や環境対策を日本館の運営に組み込む。

2. 運営管理・サービス業務計画

(1) 案内・誘導業務

来館者に対して、適切な誘導案内サイン、リーフレット等を整備すると共に、スタッフによる入館口の案内、観覧動線の案内、館内で発生する迷子や遺失拾得物等への対応を行う。また、待ち時間対策として整理券の発行や事前予約サービスを検討する。

(2) 展示案内業務

来館者に対して、映像や展示をわかりやすく紹介するため、インタープリター（案内・説明スタッフ）の導入による展示解説や展示機器操作の補助を行う。また、必要な展示解説ツールを整備する。

(3) VIPサービス業務

日本館のVIPの区分を明確にし、区分に応じた適切で細やかな対応を図る。協賛企業関係者に対してもその区分に合わせて適切かつ十分な対応を行う。

(4) バリアフリーサービス

目や耳の不自由な人、体の不自由な人、外国人、高齢者、乳幼児への観覧支援サービスを行う。

(5) 安全管理業務

来館者の安全管理のための、警備、警護、防犯・防災、疾病者への応急処置、避難誘導対策を行う。モニタリングカメラによる安全管理システムやAED（自動体外式除細動器）の導入を図る。

(6) 衛生管理業務

館内の快適な観覧環境を保持するため衛生管理を行う。また、レストランの出店もあることから食品衛生にも十分配慮する。

(7) 運営イベント

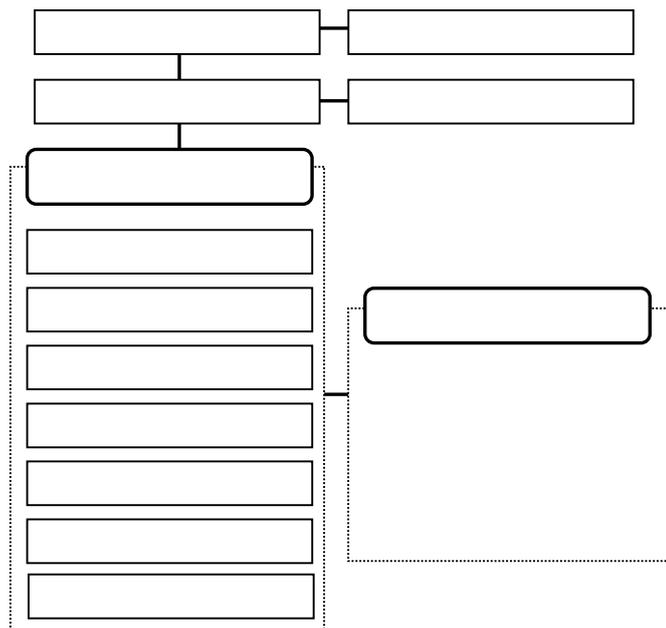
日本の季節行事や記念イベントに合わせ、他の参加国関係者や上海市民等との交流を運営イベントとして展開する。

3. レストラン

出展理念・テーマ、また、「おもてなしの心」という運営方針を具現化でき、本物を感じられるレストランの出店を実現し、来館者に適切な価格で食事・サービスを提供する。

4. 運営体制

運営業務を円滑に実施するため、日本陳列区域政府代表の下、日本から派遣する事務局管理スタッフ、館の設備や機器、行催事関係等の専門スタッフに加え、日中両国スタッフから編成される運営チームを組織する。運営スタッフについては、日本館のコンシェルジュとなることを目指して、通信研修を含め幅広い十分な研修を実施し運営方針の徹底を図る。



VII. 環境

1. 基本的な考え方

地球的課題に対して共に議論し考える舞台を提供するという21世紀の万国博覧会の性格、上海博全体のテーマ「より良い都市、より良い生活」、また愛・地球博の継承・発展という日本館出展理念を踏まえ、次のとおり取り組む。

- (1) 持続可能な都市生活を考えるに際し、「地球環境」、「生活・都市環境」、「身体環境」という位相の異なる3つの領域を一連のつながりの中で考えることを視座として持つ。
- (2) 愛・地球博における日本館の5つの指標、すなわち、温室効果ガスの抑制、汚染防止、資源循環、自然共生、環境コミュニケーションを継承して意識しつつ、さらに今回の日本出展のテーマに鑑み、“和”の文化がもつ環境対処の蓄積のより深い追求や、観客やVIP、またスタッフ等の心身体験の質を向上させる精神衛生の高い空間の創造を試みる。
- (3) 環境技術を、文化や芸術、デザインと融合して展開する。例えば、最先端の環境技術の組み合わせを、デザインの的に昇華した形で積極的に織り込んでいく。
- (4) 環境をめぐる意識や技術の可視化、環境情報の解像度の高度化、そして会期中のみならず、その前後の実践プロセスに関する情報開示のあり方などを実験的に追求する。
- (5) 建築や展示、運営などを中心とした各事業区分において、それぞれ環境負荷を低減した持続可能な環境の施設モデルともなり得るコンパクトなあり方を追求しながら、事業間の有機的な連関性を重視しながらその実施を行う。

2. 各事業区分における展開例

(1) 建築

- ① 3R、カーボンニュートラル的志向性を持った視点による建設

- ・最小限の地盤改変
- ・リサイクル材の活用

②最適環境建築モデルの構築

- ・スーパーーフによる人工環境形成（環境技術＜新エネ、省エネ技術＞とデザインの融合）
- ・和の環境制御・環境負荷低減技術の現代的デザイン展開（居住域空調、自然利用型換気システム、ヒートポンプ式省エネ等）
- ・エコマテリアル、膜技術の素材展開
- ・軽量建築

③汚染防止

- ・環境浄化（光触媒技術）
- ・水浄化（抗酸化機能水技術、上水浄化技術）

④環境モニタリング

(2) 展示

展示コンテンツにおける環境訴求

- ②展示設計・製作・施工における汚染抑止と3R
- ③環境情報の可視化

(3) 運営

- ①IT等を活用した運営システムの省力化（エコマネジメント）
- ②環境に配慮したレストラン
- ③環境に配慮したサービス、接遇（例：バイオマス食器やリサイクル材の活用）
- ④スタッフが使用する機材の相互利用システム（例：自転車）

(4) 広報

日本館全体の環境配慮のPR

(5) 行催事

- ①愛・地球博理念を継承したイベントの開催
- ②環境への意識啓蒙につながるメッセージの訴求
- ③3Rを意識した設営・撤去技術の展開

(6) サイバー

- ①日本館における環境配慮に関する情報の開示
- ②環境教育、エコマップ等の情報提供

日本館の構成 (案)

